知床博物館研究報告 Bulletin of the
Shiretoko Museum 47: 1–6 (2025)

網走市こまば木のひろばのエゾモモンガ営巣木について

後藤　ひとみ

099-2493 北海道網走市八坂196，東京農業大学生物産業学部海洋水産学科海洋生物学研究室

Nest Site Characteristics of Siberian Flying Squirrel (*Pteromys volans orii*) in the Abashiri City -Komaba Kinohiroba Park, eastern Hokkaido

Gᴏᴛᴏ Hitomi

Tokyo University of Agiculture, 196 Yasaka, Abashiri, Hokkaido 099-2493, Japan. ✉hi-gocchi@nifty.com

Keywords Siberian flying squirrel, *Pteromys volans*, Abashiri City, Hokkaido

はじめに

エゾモモンガ (*Pteromys volans orii*) はユーラシア大陸に広く生息するタイリクモモンガの一亜種で，北海道のほとんど全域に生息している．十勝地方や石狩地方など生態について比較的詳しく調査されているが，オホーツク地方については特定の地域を除きあまり調査例がない．

本調査地である網走市内の保安林では、以前から市民がウォーキングなどで利用してきたため，動物と人の距離が近く良い関係を築いてきた．しかし近年，エゾモモンガを簡単に撮影できることから，冬季になると全国から大勢の写真愛好家が集まるようになった．その結果，エゾモモンガの営巣木を叩く・ゆらすなどの行為や、林床に立ち入り貴重な草本を踏みにじる，また長時間にわたり住宅街に路上駐車をし，早朝から大声を出して仲間を呼び集める等，近隣住民に多大な迷惑をかけることで，エゾモモンガだけでなく森の生態系の破壊や近隣住民の治安までも危ぶまれるようになってきた．

そのため，市街地の近隣に位置する貴重な森を存続させ，豊かな生態系を守りたいという強い思いから，網走市内の保安林内でエゾモモンガが巣穴として利用している樹洞や，営巣木としてどの種類の樹木を多く利用しているかを5年間にわたり調査した．

調査地

調査地は北海道網走市内の高台に位置する網走市が所有する「網走市こまば木のひろば」という保安林である．この森の東側は断崖でオホーツク海に面しており，西側は市街地となっており大きな道路によって隔絶されている.「網走市こまば木のひろば」は遊歩道が完備されており，園路総延長が8,450 m，森林面積16.7haである．さらに保安林は8つの地域に分かれており，つくし地区1.26ha，A地区1.21ha，B地区6.85ha，C地区1.37ha，D地区0.27ha，E地区2.51ha，F地区0.29ha，G地区0.75haとなっている．それぞれの地区は小さい川で分断されているが橋でつながっている (図1).

この森は主にシラカンバ (*Betula platyphylla* var. *japonica*)，ハルニレ (*Ulmus davidiana* var. *japonica*)，ハリギリ (*Kalopanax septemlobus*)，ミズナラ (*Quercus crispula* var. *crispula*)，ハンノキ (*Alnus japonica*)，エゾヤマザクラ (*Prunus sargentii*)，ヤチダモ (*Fraxinus mandshurica* var. *japonica*) など湿地性の広葉樹，トドマツ，エゾマツなどの針葉樹が混生する自然林である．市や市民による植林なども行われているが，近年台風などの影響で倒木する樹木が多く，世代交代がうまく行われていない．調査地にはエゾモモンガだけでなく，多くの野鳥やエゾリス，シマリスなど

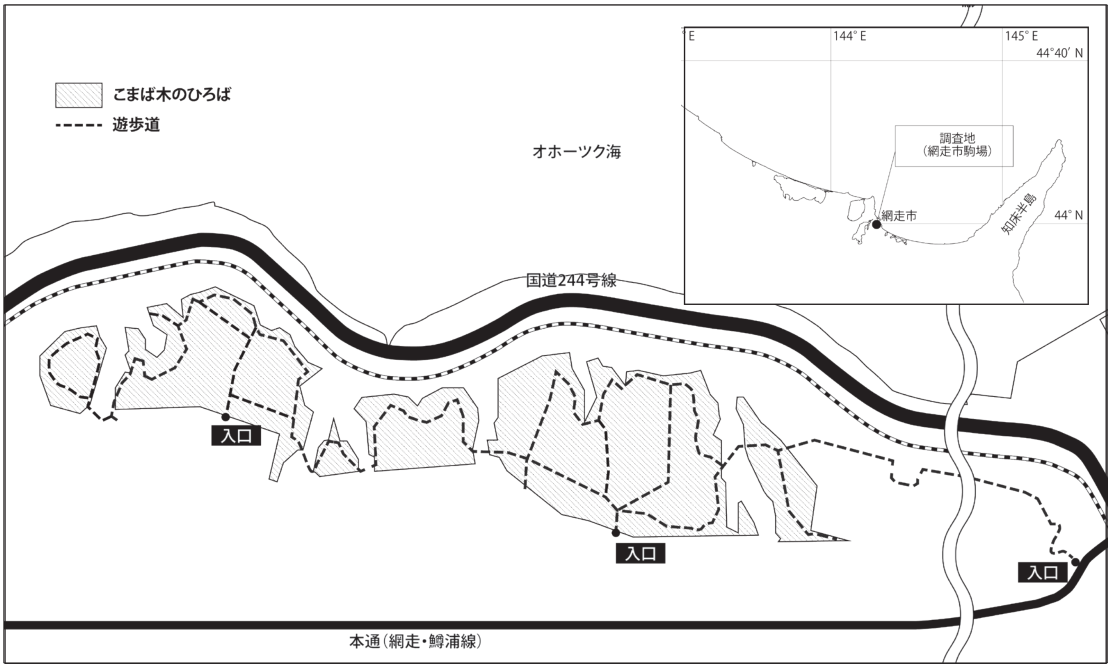

図1. 網走市こまば木のひろば地図

が生息しており，繁殖期には樹洞の奪い合いになることもある．

また，冬季にはエゾモモンガを求めてエゾフクロウが飛来し，彼らの狩場の一つとなっており，捕食者にとっては重要なエサの供給源の場所である．

調査方法

2016年から現在まで1年を通じ，調査地内のA～G地区をできるだけ定期的に朝夕2回歩き，エゾモモンガの食痕，尿痕，糞痕のある木を探し，樹洞があり営巣の可能性がある木については，樹高，地面からの巣穴までの高さ，胸高直径，樹種，巣穴の種類(巣穴が何によって形成されたかの要因，他動物によるものか自然樹洞か)，巣穴の開いている向きを計測し記録した．また，実際に使用しているかどうかは目視による同居頭数の確認，巣穴の出入り口に付着した体毛の確認，森を歩いている住民などからの聞き取り，巣穴の高さが低い場合はスネークカメラを使用して内部の様子の確認を行った．また1年を通してどのくらいの期間，継続的に巣穴を使用するかを見るために，特定の巣穴にセンサーカメラを取り付け，定点観測を行った．

結果と考察

調査の結果，A-G地区における営巣木数は全207本あり，それぞれA地区19本，B地区92本，C地区20本，D地区10本，E地区40本，F地区13本，G地区13本であった(図2)．これらは過去に使用したもの，現在使用しているものすべてを含んでおり，それぞれの地区面積の広さと比例していた．

使用した樹種は，シラカンバ(*Betula platyphylla* var. *japonica*)，ハルニレ(*Ulmus davidiana* var. *japonica*)，イタヤカエデ(*Acer pictim*)，ハンノキ(*Alnus japonica*)，ハリギリ(*Kalopanax septemlobus*)，ヤチダモ(*Fraxinus mandshurica* var. *japonica*)，エゾヤマザクラ(*Prunus sargentii*)，キハダ(*Phellodendron amurense* var. *amurense*)，オニグルミ(*Juglans mandshurica* var. *sachalinensis*)，カツラ(*Cercidiphyllum japonicum*)，キタコブシ(*Magnolia kobus*

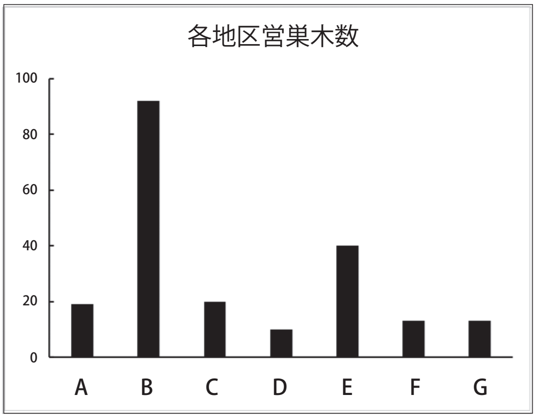

図2. エゾモモンガの各地営巣木数

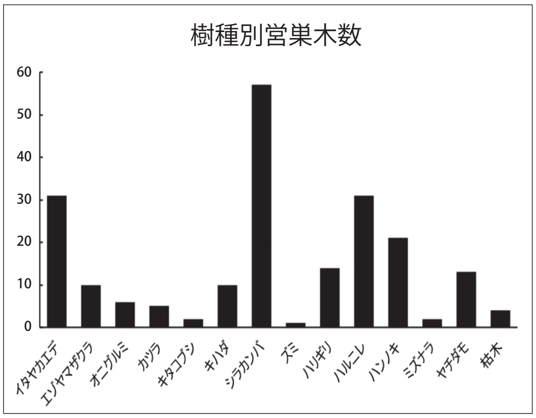

図3. エゾモモンガの樹種別営巣木数

var. *borealis*)，ミズナラ (*Quercus crispula*)，ズミ (*Malus toringo*)，樹種の不明な枯木 (Unknown) の14種類であった.

使用した樹種中，最も多かったのはシラカンバで全体の27.18％，ついでハルニレ，イタヤカエデが15.05％，ハンノキ10.19％，ハリギリ6.80％，ヤチダモ6.31％の順に多かった．低いものではミズナラ0.97％，キタコブシ0.97％，ズミ0.49％とほとんど営巣木として選択されない値を示した (図3).

調査地の樹種構成については，湿地性の広葉樹が多く，中でも営巣木として選択性の高いシラカンバ，ハルニレ，イタヤカエデ，ハンノキなどは優占種であるため, 使用する確率が高いと思われた．保安林の中にはトドマツやエゾマツなどもあるが，針葉樹を営巣木として使用している地区は一つもなかった．これは, 増田 (2003a) が斜里町で行った冬季営巣木の調査で, トドマツの利用頻度が高いとする調査結果とは異なる結果となった.

本調査は冬季に限って調査したものではないが, 重点観察地区としていたE地区では営巣木E2（写真1)，E5 (ともにシラカンバ，写真2)，F地区の営巣木F1 (ハルニレ，写真3)，F3 (オニグルミ，写真4)，F4 (ハルニレ，写真5) については1年を通じて使用し，年2回の繁殖も同じ木を使用した．また，営巣木F5 (キハダ，写真6) については，2019年の強風時に木が倒れ，斜めになってしまったがそれでも使用していた (同じ個体が使用したかについては不明). おそらく長年使用してきた営巣木については，エゾモモンガにとって使い勝手の良い快適な巣穴で，そのため繰り返し受け継がれ使用されていると考えられた．また, 巣穴の向きに関しては, 全巣穴数268個（営巣木数と巣穴数が異なるのは，1本の木に複数巣穴があるため）について8方向，東西南北，南東，南西，北東，北西のうちどちらをむいているか調べた (図4)．その結果，南向きが68個で一番多く，次いで東向き43個であった．また，南東，南西を含む南向きの巣穴は119個で全巣穴中，44.4％と高い値を示した．東向きを含む日当たりの良い巣穴の利用率は全体の60.4％であり，エゾモモンガは巣穴に関して日当たりの良い巣穴を好む傾向があり，巣穴利用の重要な条件となっていると思われる.

さいごに

調査地では，ウォーキングを楽しむ市民が多いため，市では危険と判断した木や市民から要望のあった木などは積極的に伐採している．しかし，植樹してもある程度の大きさになるにはかなりの時間を要するため，樹洞を住みかとするさまざまな動物たちの巣穴が不足することも考えられる．そうなれば，この森のエゾモモンガなどの生息数も減少する

写真 1.　営巣木 E2

写真 2.　営巣木 E5

写真 3.　営巣木 F1 とその巣穴から出るエゾモモンガ

写真 4.　営巣木 F3

写真 5.　営巣木 F4 とその巣穴から出るエゾモモンガ

写真 6.　営巣木 F5

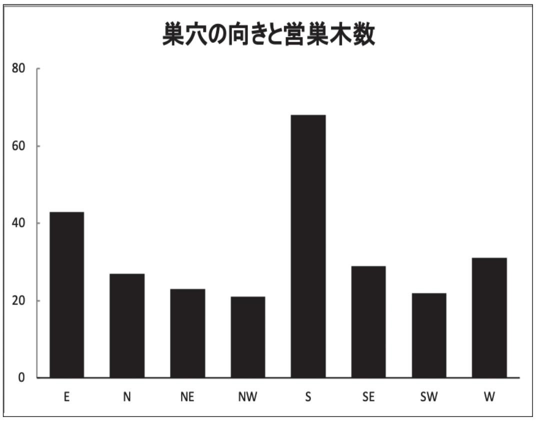

図 4.　巣穴の向きと営巣木数

と考えられるため，考慮が必要である．そのためにも，エゾモモンガの個体数推定は必要不可欠な課題となる．また，エゾモモンガの生息数の減少は，捕食動物のフクロウ類にとっても餌生物が少なくなるため大きな問題であろう．森の生態系を守るためにも，森林の保護も含め，森林管理の在り方を模索する必要があると考えられる．

謝辞

調査に関しては適切な助言，ご指導いただいた東京農業大学生物産業学部教授 小林万里先生，帯広畜産大学特任講師 浅利裕伸先生，捕獲調査にご協力いただいた個人事業主 生田駿氏，情報提供を多く寄せていただいた市民の皆様に深く感謝いたします．

引用文献

増田泰．2003a．エゾモモンガ（*Pteromys volans orii*）が越冬期に利用した営巣木．知床博物館研究報告 24：67-70

参考文献

浅利裕伸．2008．狭小林地に生息するエゾモモンガの生態と保全に関する研究．岩手大学大学院連合農学研究科学学位論文（博士論文）．

蔦本樹・古川竜司・鈴木圭・柳川久．2014．糞を用いたタイリクモモンガ *Pteromys volans* の生息確認方法．哺乳類科学．54（2）:201-206

中野繁・日野輝明・夏目俊二・林田光祐・稲葉芳和・奥田篤志．1991．冬季におけるエゾモモンガ（*Pteromys volans orii*）の営巣木の特徴と巣穴の構造．北海道大学農学部演習林研究報告 48(1)183-190

増田泰．2003b．エゾモモンガ（*Pteromys volans orii*）の日周活動．知床博物館研究報告 24：53-58

村木尚子・柳川久．2006．帯広市における鳥獣類による樹洞利用の季節変化．樹木医学研究 10：69-71

柳川久．1999．エゾモモンガの生態（ビデオ発表）—北海道十勝平野における一年間の記録—．哺乳類科学 39（1）:181-183